

なぜ民間委託にするのか？

新中学校給食センター、直営にせず

8月16日の市議会全員協議会で市教委より、いま建設中の第2学校給食センターの調理業務を民間委託にするという案が報告されました。2015年4月よりスタートする中学校給食の内容を左右する、重大な問題です。

説明資料によると、献立の作成、食材の調達は市が行なうが、調理業務など現場の仕事はすべて民間業者が行なうこととなります。民間委託の利点として、専門技術等の活用による業務の合理化、調理業務が軽減される栄養士による食育の推進、人事管理などの事務の合理化、運営経費が年間約3000万円安くなる、としています。

「人件費が3000万円抑えられる」が最大の理由？

について、民間業者よりも長い経験と専門知識、技術を集積しているのが、鈴鹿市の直営給食です。いまの小学校給食には何の問題もありません。

について、栄養士が調理現場に入れなくなり、書類と口頭だけの指示しか出来なくなるのが、いちばんの問題です。それを暇が出来るので食育活動に時間が取れる、という理屈は本末転倒です。結局、民間委託すれば3000万円安くなるという点だけが、ねらいかと思われます。

試算によると、市直営だと[正規14人、嘱託14人、臨時8人]年間人件費が1億3,135万円、民間委託[責任者・副責任者5人、調理員10人、臨時25人]だと1億132万円、で差引き3000万円安いこととなります。それ以外の費用は、直営も委託も変わりません。要するに、賃金の安いパート労働者を多く使う分だけ安くなるということでしょう。

中学校給食が民間委託でスタートすれば、そのうち市直営で行なっている小学校給食にも波及するでしょう。いまが、考える大事な時です。

参議院で躍進 8 議席「倍返し」だ！

7月の参議院選挙で、日本共産党が3議席から8議席に躍進したことは、久しぶりにうれしい出来事でした。党と後援会のみなさんの頑張りと、多くの市民が「共産党の値打ち」を改めて認識していただいた結果だと思います。

鈴鹿市での得票の到達点は、表のとおりです。全国での515万票に貢献はしましたが、全国平均得票率9.68%には、まだ2600票ほど足りません。次の選挙では8000票を超えることを目標に、さらに努力します。引き続きご支援をよろしくお願いします。

国政選挙での日本共産党・比例代表の得票の推移

	2013年参院選	2012年衆院選	2010年参院選
鈴鹿市	5,643票(6.61%)	4592票(5.09%)	3767票(4.21%)
全 国	515万票(9.68%)	368万票(6.13%)	356万票(6.10%)

消費税・TPP・原発・憲法など、問題が山積



早朝の白子駅前でのメガホン宣伝

国会は衆・参とも自民・公明の与党が多数をとり、安倍政権は悪政への暴走にスピードを加えています。日本共産党は国民の暮らし、国の主権、平和憲法を守るために全力をあげます。行き詰まった政治・経済の打開に向け、しっかりと対案を示して国会でも地方でもがんばります。

八ヶ岳の最高峰・赤岳に登りました

8月1日、猛暑の下界をはなれて信州の八ヶ岳に出かけました。当日は雨に降られて縦走をあきらめ、最高峰の赤岳のみ登りました。晴天なら富士山などの大パノラマが見られたのですが、雲ばかりで残念でした。しかし足下はコマクサなどの花がきれいでした。



幼稚園統廃合計画に、意見書を提出

7月に市教委が出した「鈴鹿市立幼稚園再編整備計画案」（今後10年以内に23園を13園に統廃合する）に対して、8月12日に私が提出した意見書の要旨は、以下のとおりです。

1．「適正規模の集団」について

初期に幼稚園の定員割れの問題が市議会で議論された時の論点は、子どもが少なくても先生を配置するのがもったいないという「費用対効果」論でした。「適正規模」が15人というのは、それ以下の子ども集団に先生を配置するのが、財政的に不適切だという視点からの意見だと思いますが、解決する方法は閉園や統廃合以外にもあるという視点から、再考を求めるものです。

「費用対効果」論に欠けているのは、農村部や人口減少地域でも安心して子育てができるように行政が支援するのか、市内のどこに住んでいても必要な行政サービスは提供しようという姿勢をもつのか、という点です。

2．「中学校区を単位とした再編成」について

5歳の子どもに「中学校区」を生活圏にせよということにどんな意味があるのでしょうか？幼児にとっては、いくら大きくても「小学校区」ぐらいが生活圏ではないでしょうか。統廃合を進めようという場合には、具合のいい物差しになるでしょうが、子どもにとって何の意味もない物差しを当てて、子どものための重要な施策を決定することは問題だと思います。

また実際に、公立・私立の保育所や私立の幼稚園は、中学校区など関係なしに子どもを集め通わせています。鈴鹿市の子どもをみんな中学校区を基本にまとめようというのでなく、公立幼稚園にだけこの物差しを当てようという考え方には無理があります。

3．入所できない保育所に入れるという矛盾

例えば鈴峰中校区の地図を見ると、3つの幼稚園を1つに統廃合しても、公立・私立の保育園が5つもあるから、どこかに入りなさいという計画になっています。しかし、保育園は「保育に欠ける」子どもを受け入れる施設で、だれでも入ることが制度上できません。「絵に描いた餅」です。

この再編整備計画を本当に実効性あるものにするには、保育園が「近くの幼稚園がなくなった」という理由で受け入れてくれることが必要です。

ずいそう



いつか来た道、また通るか

この夏、日本の戦争を描いた3本の映画「終戦のエンペラー」「少年H」「風立ちぬ」をまとめて観た。どれも戦争を直接には描いていない作品だが、あの戦争が何だったのかを、庶民、支配者、技術者という、異なったそれぞれの視点から語っている。

「少年H」は原作者・妹尾河童が、日本が戦争に突き進む時代に小学生から中学生に成長する中、神戸での実体験そのものである。自由が押さえられ、食料が乏しくなり、クリスチャンの妹尾家が「非国民」呼ばわりされる。うどん屋の兄ちゃんが特高に捕まったり、旅芸人の女形が徴兵となり首吊り自殺したり、外国人に洋服を仕立てる父親がスパイ容疑をかけられたり。そんな中でも、時流に流されず、自分の目でしっかり世の中を見ると、身をもって息子に教える父親の姿。そんな人がいたという事実で救われる。

「終戦のエンペラー」は、戦後の日本に君臨したGHQ・マッカーサーの部下フェローズが主人公である。戦争における天皇の責任を調べ上げる任務を命ぜられるが、いくら関係者を調べても「天皇の戦争責任」は立証できず、「戦争を始めたのが誰かは分からないが、終わらせたのは天皇だ」との結論を出す。戦後日本の再建にあたり、天皇制の存続を利用したGHQの思惑と、日本支配層の利害が一致し、その結果、現在に至る「何でもうやむや」にする体質がつよく残された。

「風立ちぬ」の主人公・堀越二郎は、子どものときから飛行機に憧れ、三菱に入り戦闘機の設計に没頭する。少年の日の夢は実現したが、それは人殺しの兵器としての飛行機であった。映画中のセリフ「軍はこの飛行機で、どこで戦争する気なんだろう?」「機関銃を載せなければ、機体をさらに軽くできるんだが」などは、より性能の良い飛行機を作りたいとの向上心と、それが何に使われたかという現実との乖離を、端的に表している。そしてラストの場面、たくさんの飛行機の残骸の山の中を歩く堀越は、彼の飛行機が「1機も帰ってきませんでした」と語る。

評論家の立花隆は、「これは、明治以来西洋に追いつき追い越せで、急ごしらえに作った富国強兵国家日本が、富国にも強兵にも失敗し、大破綻をきたした物語だ」と言う。その通りだと思うし、今も変わらずこの国は、また同じ道をたどろうとしているのでは、とも思う。